

ち一九一四年の通報第三號に、Aurousseau 氏が *Propose de L'Article de Sylvain Lévi: - Le "Tokharien B", Langue de Koutcha* と題した短篇を載せて解釋を試みてあるから、併せて茲に附記して置く。

Aurousseau 氏に據ると、『蘇伐勃駛 (Svarṇapuspa) が唐の高祖の即位を祝する爲に使を送つた年次は唐書に見えて居るが、邊裔典卷五十一にも「高祖武德元年龜茲遣使入朝」と見ゆ、また資治通鑑補正には、六一八年(即ち武德元)の條中に、「龜茲王蘇伐勃駛遣使來朝、尋卒、子蘇伐疊立」と見えて居る、故に Svarṇapuspa の使の來たのは六一八年で、高祖即位の年である。而して Svarṇate の位に即いたのもまた同年でなければならぬ、こゝに於て初めて Svarṇate の統治の年と kṣuṇ の數との間に共通點を捕へることが出来る、Svarṇate の即位はかく六一八年で、その死は六四六年であるから、其の治世は二十九年間である。一方 1 kṣuṇ を王の即位の六一八年とすれば $618 + 23 \text{ kṣuṇ} + 6 \text{ kṣuṇ} = 646$ となつて、Svarṇate の死没の年と一致することになるのである。併しながら此の假定を是認すると、一の了解す可らざることに遭遇する、それは何故に六四〇年迄を 23 kṣuṇ と數へて、六四一年に 1 kṣuṇ と再び始めるかといふ問題である、殊にまた、Saldirang 驛の通行免狀の日附けの最も遅い年が、Douldour Agour のものと一致するにせよ、kṣuṇ 6 なる數が此の第二 kṣuṇ の最後の年なることを證明するものは一も存しないではないか、されば此の kṣuṇ の年なるものは Svarṇate の統治の年とは一致するものでないかも知れない、かくて問題は益々紛糾し、たゞ kṣuṇ 21 なる數は六一八年よりは前ならず、六四六年よりは後ならずといひ得るに止る。尙またかの Douldour Agour の記録の斷片が、22, 23 kṣuṇ に起つた出來事を記し、その後に直ちに 3 kṣuṇ に起つたことを連接して書いてあるといふ事が何故に 23 と 3 との間には尙一つもしく